藤原宮
朝堂院朝庭の調査

飛鳥藤原第169次調査　現地説明会資料
(独)国立文化財機構奈良文化財研究所　都城発掘調査部

発掘調査区全景（南東から）

藤原宮（694－710年）の中心部には、天皇の空間である大極殿院、臣下の空間である朝堂院が位置し、様々な政務や儀式の場として使用されました。朝堂院の中央には朝庭とよばれる礫敷の広大な広場があり、儀式の際には役人たちがここに整列しました。今回の調査地は、朝庭の中央北寄りに位置しています。

これまでの調査により、朝堂院朝庭は径5~10cmの礫を敷いて整備されていたことがわかっています。今回の調査区内でも、同様に礫敷を検出しましたが、全体的に礫の遺存状況は良好ではなく、部分的に礫敷下の整地土が顔を出していました。この礫敷面には南北方向の暗渠1条が設けられていました。礫を敷きつめる直前に浅い溝を掘り、礫敷と一体的に礫を詰めて暗渠としています。礫敷直下の整地土上にも、南北方向の素掘溝3条が設けられており、広場内の排水を目的に設置されたものとみられます。

今回の発掘調査では、さらに礫敷下の整地土を掘り下げ、多くの造営期の遺構を発見しました。まず調査区の西側では、藤原宮の造営に先行して設置された朱雀大路の東側溝とそれに沿って南北方向に並ぶ柱穴列を検出しました。柱穴列は朱雀大路沿いに設けられた区画施設の痕跡と考えられます。

また調査区中央では、藤原宮造営時の資材運搬用の運河（幅約6m、深さ約2m）を検出しました。この運河は、北面中門や大極殿北方の調査でも検出されており、大極殿北方では天武末年頃の木簡が出土しています。これまでに検出されたものをつなぎあわせると運河の総延長は570m以上に達します。

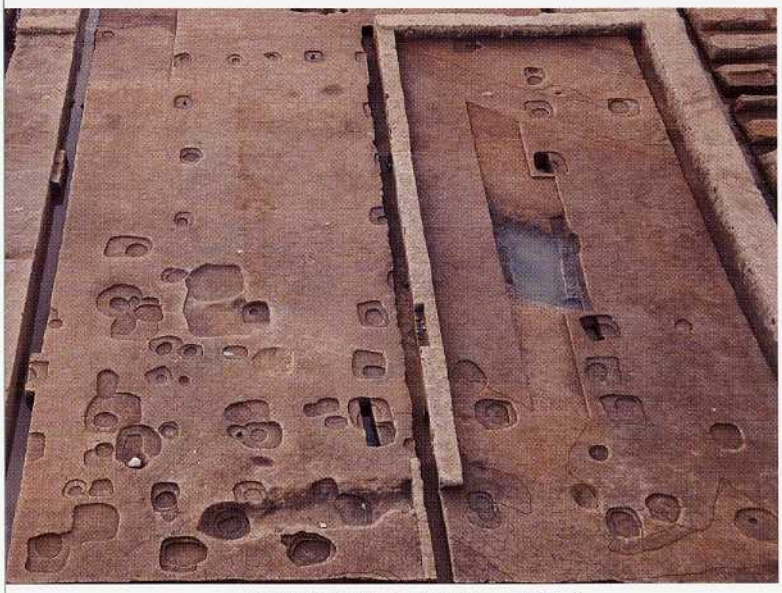
一方、調査区東側では、南西から北東にむかってのびる斜行溝を発見しました。この溝は、南方の調査区外で運河と接続しているとみられます。運河から斜行溝が分岐する状況は、これまでの調査でも2カ所で確認されており、運河には一定の間隔でこうした支流が設けられている様子がうかがえるようになりました。

さらに調査区東側では、斜行溝を埋め立てた後に、堀立柱建物が建てられたことが明らかになりました。今回の調査区内では5棟を検出しています。いずれも礫敷下での検出で、藤原宮造営期の建物と考えられますが、少なくとも3時期にわたって建て替えがなされたようです。

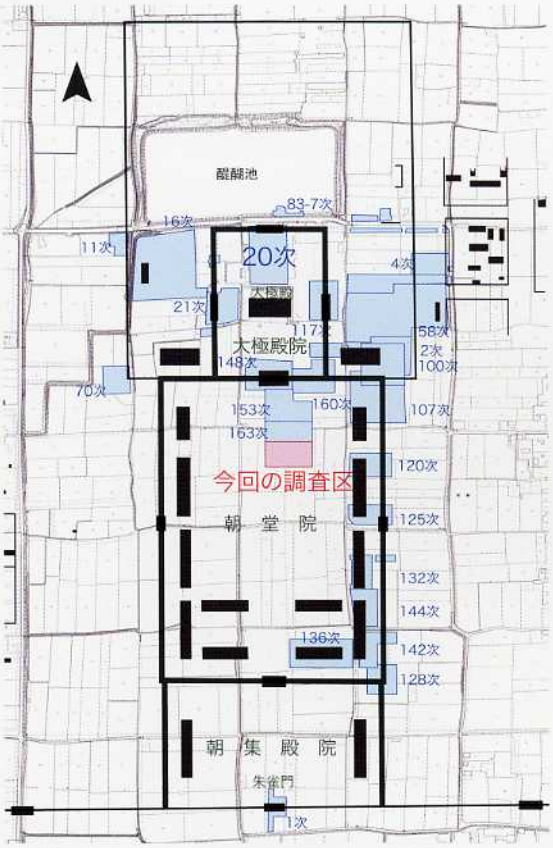
藤原宮朝堂院の礫敷広場下層でこうした建物が密集して検出されたのは、今回の調査が初めてです。ただし、現段階ではこれらの建物群の性格は不明であり、今後、周辺部の調査を進める中で検討を深めていく必要があります。

礫敷広場の検出状況　南から
(北に大極殿跡、耳成山をのぞむ)

今回検出した運河と先行朱雀大路東側溝　南から



礫敷下の掘立柱建物　東から



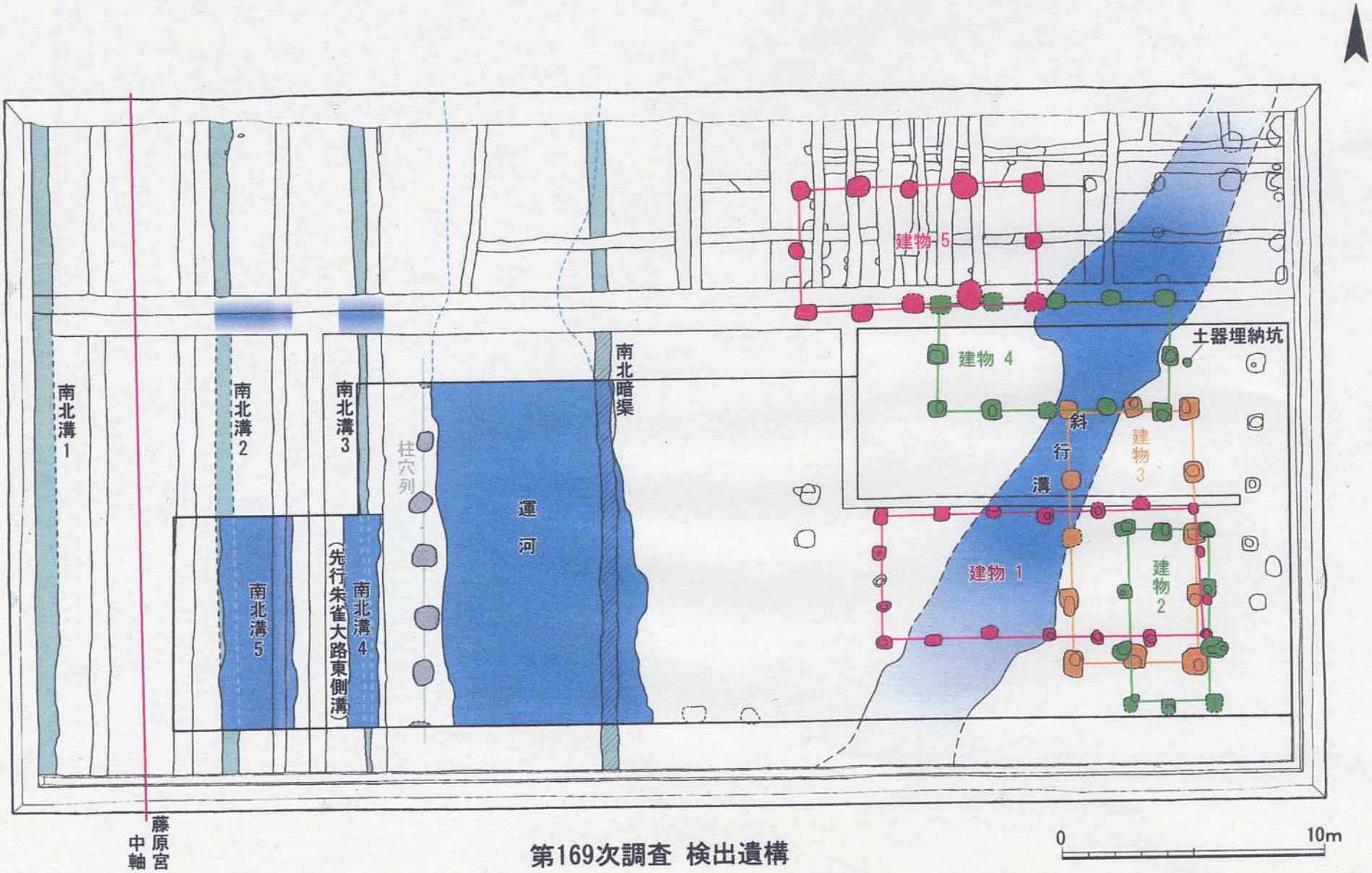
調査区位置図
(青色はこれまでに発掘調査した場所)

第 20 次調査(1977 年)検出の運河と先行朱雀大路東側溝　北から
(奥の森が大極殿跡)

掘立柱建物の柱根

短頸壺出土状況

独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 都城発掘調査部
〒 634-0025 奈良県橿原市木之本町 94-1　asuka@nabunken.go.jp



第169次調査 検出遺構